

球磨川と生きる

大和一酒造元 下田文仁





湍^{たぎ}
つ瀬の

球^く磨^まの川霧あかとき

凝^こりてなるや 激^こしこの酒

海音寺潮五郎「おどんな日本一」より



1

球磨川の恵み





球磨村の棚田

（「街道をゆく 肥薩のみち」）

また、球磨川が生み出す川霧についても、「川霧が立つと山壁山壁に寄りこもつて容易に流れ消えず」このことが「球磨の米を美味にしたことは確かである」と記しています。

このように、球磨川の恵みによつて形成された人吉球磨地方のことを司馬遼太郎は「日本で最も豊かな隠れ里」と評価したのです。

近世になって、この豊かさはさらに広がります。16世紀末から球磨川の水を活かしたかんがい施設の整備が進んだのです。全長28 kmに及ぶ幸野溝^{こうの}。19 kmの百太郎溝です。幸野溝は建設途中に2度球磨川の洪水に見舞われながら、相良藩士高橋政重^{まさしげ}の熱意の下、十年の歳月をかけて造られました。また、百太郎溝の工事は、藩の支援もなく、農民総出の手掘りで進められました。が球磨川の堰が何度も流されました。堰を完成させるために百太郎という農民が人柱になったという伝説が残されています。



球磨川焼耐舟 (大正8年)「目で見える球磨人吉の100年」より

舟運で運びだされました。戻り舟は帆を張つて風の力で急流を遡り、外の貴重な物資を人吉に運びました。

球磨川は物資だけでなく人も運びます。江戸時代には球磨川の船を使つて参勤交代が行われ、また一般の人も川舟を利用しました。明治のころの人吉八代間の一人分の舟賃は下り40銭、上り1円20銭だったそうです。

球磨川を中心にした物資や人の流れができ、その集積地として人吉の町は繁栄していきました。

この地方の経済や文化にとつて球磨川はなくてはならないものなのです。そんなに大切な川ですから各学校の校歌に球磨川は歌われています。

♪ 清流球磨の水のごと すが 清しき心磨かんと

ここに集える我ら若人 【人吉高校】

♪ 瀬音さやけき球磨川の 流れに心磨きつつ

【西瀬小学校】

2

球磨川が
課した試練

